

# 日本ギヤスケル協会 第31回大会

2019年10月5日(土) 実践女子大学 渋谷キャンパス 603教室  
〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49 (12:30より受付開始)

13:00 開会の辞

日本ギヤスケル協会会長 木村 晶子 (早稲田大学教授)

13:05~15:20 シンポジウム 「イギリス小説における黒人の表象あるいは不在」

「19世紀小説における黒人の不在——ギヤスケル、ディケンズ、サッカリー」

司会・パネリスト：石塚 裕子 (神戸大学名誉教授/盛岡大学教授)

「“A Negro had a soul?”: 18世紀イギリス文学における黒人表象」

パネリスト：武田 将明 (東京大学大学院准教授)

「‘Rather a Friend to the Abolition’——ジェイン・オースティンの作品における「黒人」への言及」

パネリスト：新井 潤美 (東京大学大学院教授)

「Harriet Martineau から George Eliot へ——反奴隷制から人種問題へ」

パネリスト：松本 三枝子 (愛知県立大学名誉教授)

15:30~16:00 総会

16:05~17:30 講演

司会：宇田 和子 (埼玉大学名誉教授)

「拒絶する女たち——マライア・フルアート、エリザベス・ベネット、そしてマーガレット・ヘイル」

講演者：鈴木 美津子 (東北大学名誉教授)

17:30 閉会の辞

日本ギヤスケル協会 大野 龍浩 (熊本大学大学院教授)

懇親会

時間：18:00~20:00

会場：Bar Espanol LA BODEGA (バルエスパニョールラボデガ) 渋谷ヒカリエ店 (渋谷駅直結)

Tel: 03-6434-1480

参加費：4,500円

※上記全プログラム、会員外の方の参加も歓迎いたします。

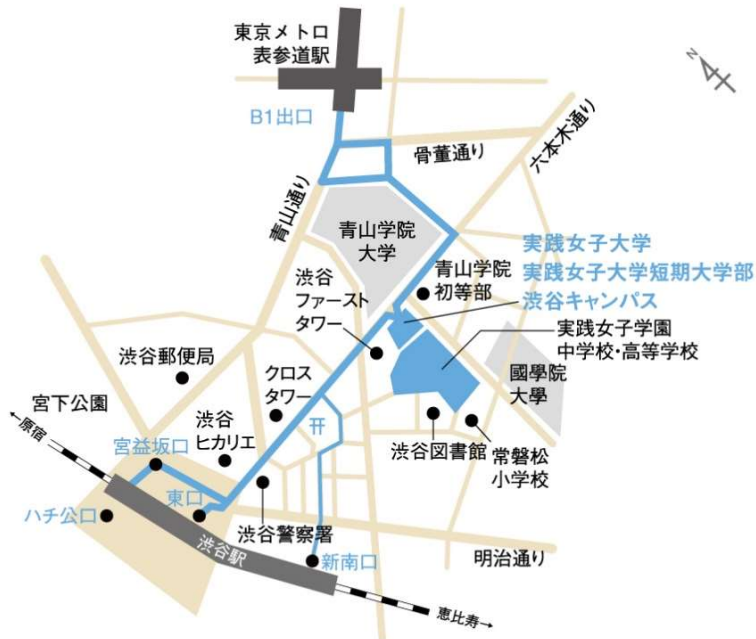
本大会に関する問い合わせ：日本ギヤスケル協会事務局

〒501-6295 岐阜県羽島市江吉良町 3047-1 岐阜県立看護大学 木村正子研究室

E-mail: mkimura@gifu-cn.ac.jp

## 交通アクセス

### 実践女子大学 渋谷キャンパス



## アクセス方法

⇒渋谷駅から

◆ JR (山手線、埼京線、湘南新宿ライン) / 東京メトロ (銀座線、半蔵門線、副都心線) / 東急 (東横線、田園都市線) / 京王井の頭線 東口 16C 出口から徒歩約 10 分

⇒表参道駅から

◆ 東京メトロ (銀座線、半蔵門線、千代田線) B1 出口から徒歩約 12 分

## 懇親会の会場

Bar Espanol LA BODEGA  
(バルエスパニョールラボデガ)  
渋谷ヒカリエ店  
Tel: 03-6434-1480



## 梗概

### シンポジウム

#### 「イギリス小説における黒人の表象あるいは不在」

18世紀小説に黒人は描かれている。また、時代が下って19世紀後半ともなれば、植民地を舞台にしたコンラッドやキプリングの作品、或いはシャーロック・ホームズものの小説に、植民地からやってきた黒人やインド人などがふたたび登場する。ところが19世紀の前半から中期にかけて、なぜか小説の中から黒人が消えているようだ。19世紀当時ロンドンには約5千人の黒人が住んでいたという。多くの作品で舞台を主にロンドンにおいたディケンズでも、殆ど小説の中に黒人を描いていない。国際都市リヴァプールが身近だったはずのギaskellもまたしかりだ。もっぱらアメリカの奴隷制廃止運動に共鳴している。アフリカ系（西インド）やインド系と多様な黒人像を垣間見せてくれるサッカーは舞台をほぼ18世紀に置き換えている。本シンポジウムでは18世紀から19世紀小説の中で黒人がどのように表象され、扱われてきたのか、あるいは不在となっていたのかを検討してみたい。

#### 「“A Negro had a soul?”: 18世紀イギリス文学における黒人表象」

武田 将明（東京大学大学院准教授）

17、18世紀小説における黒人の表象といえば、まずアフラ・ベーンの『オールノーコ』（1688）が思い浮かぶ。この作品の背景をなす、ヨーロッパアフリカアメリカ間の三角貿易については、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』（1719）、ジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』（1726）にも見られる。このように、19世紀小説に比べると露骨な黒人への言及が17世紀後半から18世紀前半の小説には見られる。他方、18世紀半ば以降は、ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』（1759-67）における、黒人の「魂」（soul）をめぐる有名な一文や、黒人自身による文章、とりわけオラウダ・イクイアーノの自伝（1789）のように、豊かな黒人表象が見られる反面、イギリスの多数派の中で黒人が見えない存在になりつつある予兆も感じられる。本発表では、その象徴的な表現をサミュエル・リチャードソンの『パミラ』（1740）のうちに見ることにしたい。

「‘Rather a Friend to the Abolition’ — ジェイン・オースティンの作品における「黒人」への言及」

新井 潤美（東京大学大学院教授）

ジェイン・オースティンの作品にはいわゆる「黒人」の登場人物はでてこない。しかし、奴隷貿易への言及がいくつもあるのは周知の通りである。この発表では主に『エマ』と『マンズフィールド・パーク』を取り上げる。それぞれの作品における「奴隷貿易」あるいはその反対運動についての言及を見ながら、当時のイギリスにおいて奴隷貿易反対運動がどのように広まり、どのように受けとめられていたか、その背景を考察する。

「19 世紀小説における黒人の不在——ギヤスケル、ディケンズ、サッカリー」

石塚 裕子（神戸大名誉教授／盛岡大学教授）

ディケンズは、フェイギン『オリヴァー・トゥイスト』（1838）やユライア・ヒープ『デイヴィッド・コパフィールド』（1851）を性格の悪い身の毛もよだつケチとして、ユダヤ人を皮肉っている。が、同じ少数民族でも、黒人は無視とも言え、毛嫌いの対象にすらなっていない。ギヤスケルの場合は奴隷制廃止運動の矛先をもっぱらアメリカの黒人差別に向けているようだ。サッカリーは、黒人を（インド、アフリカ、西インド等）多様に登場させているが、おおむね時代設定を奴隷貿易華やかなりし 18 世紀とするか、舞台をアメリカにおくかのようだ。三者の態度を検討し、サッカリーは初期作品を通して、これには、どういう事情が推察されるか考えてみたい。

「Harriet Martineau から George Eliot へ——反奴隷制から人種問題へ」

松本 三枝子（愛知県立大学名誉教授）

19 世紀初期に小説を書いたマーティノーには、黒人奴隷からハイチ革命の指導者となった Toussaint L'Ouverture を主人公にした歴史ロマンス *The Hour and the Man* (1841) がある。奴隷制廃止論者であったマーティノーは、この他の物語でも解放される奴隷を描いている。エリオットは、1876 年に Harriet Beecher Stowe 宛ての書簡で、イギリス帝国内の東洋人に対する自国民の傲慢な態度を痛烈に批判している。ストウの描く黒人奴隷への抑圧は、エリオットにはイギリス人の人種偏見に通底するものと認識されている。そのような意識の中で、エリオットはイギリス人のユダヤ人に対する差別や偏見を *Daniel Deronda* (1876) で書いている。

## 講演

拒絶する女たち——マライア・フルアート、エリザベス・ベネット、そしてマーガレット・ヘイル

鈴木 美津子（東北大学名誉教授）

ロマン主義時代の英国小説には、社会的地位の高い男性からの求婚を毅然として撥ねつける女性がしばしば登場する。ロバート・ベイジ（Robert Bage, 1728-1801）の『ハームスプロング』（*Hermesprong*, 1796）に登場するマライア・フルアート（Maria Fluart）、シドニー・オーエンソン（Sydney Owenson, 1796 or 1783-1859）の『女性またはアテネのイーダ』（*Woman; or, Ida of Athens*, 1809）のイーダ・ロセメリ（Ida Rosemeli）、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』（*Pride and Prejudice*, 1813）のエリザベス・ベネット（Elizabeth Bennet）などである。『北と南』（*North and South*, 1855）のマーガレット・ヘイル（Margaret Hale）も、男女の階級上の関係は逆転しているものの、まさしく求婚を拒絶する女である。拒絶する女が小説に登場する契機となったのは、女権論者メアリ・ウルストンクラフト（Mary Wollstonecraft, 1759-97）の影響があると思われる。本講演では、拒絶する女のモチーフを持つ作品群に潜む政治的意図を探ってみたい。